

礎を觀じて、靜中動あり、吾等が社會協力のの上に自己の能力を識認して、動中靜あり。人によし一夜東風の雨、緑は遍し天街の舊草痕、吾等は箇中の消息に學ぶ所なかるべからず。

○ 萬物無心にして相和す。人たゞ此の心あり、此の心あるが故に私情、我れを鎖し個性我れを縛して相和する能はず。私情を徹せよ、個我を脱せよ。これ相和するの基調たり。しかも唯だ漠然として人我を没し、彼此を忘るゝは之れ和にあらず、和は猶ほ禾の口に合するが如く、各其の個性を全うして力を協すなり。春風徐ろに吹いて梅蕾開き、春雨靜かに濺いで青苔長す、萬物各々用と處とを異にして然かも相和して春色絢爛の美を成し、人は自覺ある協力によつて文運を助長し來る。

○ 自覺ある協力は、相互の理解によつて初めて其の結合を鞏うす。現代に缺けたる

ものは官民相互の理解なり。父子相互の理解なり、夫婦相互の理解なり、師弟相互の理解なり。抑々亦資本家と労働者相互の理解なり、更に之れを大にしては各國相互の理解なり。自ら推して他を察し、他を推して自らを顧みよ。相互の理解こゝに生じ、感情の融和こゝに成り、道義の基礎こゝに立ち、協力の眞趣こゝに顯はれん。花は雨の過ぐるに任せて紅いよゝゝ色を添え、柳は風にもまるゝに隨うて綠ますゝ濃かなり。相互に理解し來るの時、何の不平かあらむ。

○ 大觀せよ。唯だ眼光小なるが故に相互の理解を缺き、全局の協力を忘る。眼光を潤大にせよ。我が生は之れ協力の結果にして、瞬時も之れを離れては其の存在を保ち難きにあらずや。されば世に一微塵といへども輕視すべきはなく、一賤役といへども蔑如すべきはなし。渾然融合、以て全局を羅織す。職に貴賤をいひ、事に尊卑を分つは小我なり、打算し來れる妄想のみ、窓前一枝梅、僅に半輪の蕾を破るある

も、早や既に天地の春なるを報じ盡くせるにあらずや。

○ 他人を自己とし、自己を他人として観察す。これ修養の要義なり。他人を自己とするが故に寛容あり、自己を他人とするが故に酷評あり、先哲の「人に接する春風の如く、自ら肅む秋霜の如し」といへるもの即ち之れ。自ら肅む處に自覺は閃めき。人に接する所に協力成る。

○ 思ひを春雨に寄せて想起を禁ずる能はざる維新の志士頼三樹の「春自ら往來して人送迎す。愛憎何事ぞ陰晴を分つ。花を落すの雨は是れ花を催すの雨。一樣の檐聲前後の情」の詩なり。まことや春は自ら往來するに、人は之れを迎へて喜び、之れを送りて悲み、晴には嬉々として百鳥囀ると共に樂み、陰には花時風雨の多きを厭ふ。想ひ見よ、花を散らすの雨は、花を催すの雨、軒端をつたふ玉水の聲に何の差

かあり、何の別かあらむ。しかも人情前後を異にす。一樣の春雨にも此兩般の情あり。況んや曾ては改革の氣運を促進し來れる志士の、今は元老となつて之れを阻止せんとするをや、心なき春は其の往來に任すべきも、人に對しては自ら前後の情を誘致せざるを得ず。此一絶、寧ろ世相と人心に於て別殊の意義を感じ來る。

○ 車軸を流す夏の雨には勢ひを感じ、浙瀝として落葉を誘ふ秋の雨には寂を感じ、霽まじりの冬の雨には唯だ蕭殺の氣を感じるのみなるも、春の雨はしめやかなる中に、生氣流動するあつて、烟るが如くに一切を融化し盡くす處に、やがて笑むべき花の早や樹々の梢に薄紅を催し來り、次第に染まり行く柳の糸も、自から緑に彩り渡りて、追懷の涙を廻らして希望の笑みたらしめ、春闌にして一枝の海棠、雨を帯ぶるの艶姿、人を惱殺し、春暮れて燕子落英を銜むの頃となつては、「滿庭の春雨、緑、烟るが如く」、花を催すの初めより花を散らすの終りに至るまで、一道の生氣脈

々として人心を鼓舞するものあるを思はしむ。秋の雨に身の老を啣ち、冬の雨に越し方行末を悲観せしものも、春の雨には人生尙ほ爲すあるの意氣を感せざるなし。

○ 青春の氣、これ人生活動の源泉なり。身に老るとも、心に老る勿れ。二十歳前後主義は早老の弊ある我が國民を警覺するの標語にして、青春の氣を湛へよとは吾等のしばし提言する所。たゞ此青春の弊は浮華にあり、輕躁にあり。春雨一夜閑窓の下、香を焚て燕坐、心、水の如くなる時、自ら浮華と輕躁とを警め得むか。浮華と輕躁とを脱し去る所に自覺の輝きあり。梅櫻桃李、色さまざまにして、しかも和して一段の春色を織り成すも、此の霏々たる雨に萌すを思へば、檐頭の點滴も亦正に心華開發の因たらざらんや。

消暑時言

○ 心頭の清風、無我より涼しきはなし、我執一たび起るの時、心火盛んに燃えて、身は山中にありと雖も、思ひは街頭を走せて、左思右想、悶々の情、我れを燒殺せすんば止まじ。我執斷じ去るの處、紅塵萬丈の裡、尙ほ清風徐ろに來つて、疎簾わづかに動いて小庭の夏草、露を拂ふの處、涼氣滿腹、他の思ひ及ばざるものあらん。

○ 當今の問題は、我執の問題なり、各人も我を執して自利を争ひ、怒火旺んに燃え、心炎盛んに揚る。資本對勞動の問題もこれなり、政黨政派の問題もこれなり、宗派の問題之れなり、孟軻云はずや、上下交も利を争うて國危しと、又いふ「王何ぞ必ずしも利を云はむ、仁義あるのみ」と。三伏釜中の感も一陣の清風之れを涼却す。仁義の教訓、これ亦當今諸人が頭燃を拂ふべき清風にあらずや。

○ 仁といひ、義といふ。人呼んで時代遅れと爲す。遅れたるか、先きだてるか、唯だ時代に追隨するのみが能事にあらじ、覺醒の聲は反面より起る。砲火相接する世界の戦禍も正義人道の叫びに反省を促したる所多きを知らずや。殊に況むや、仁といひ義といふもの、もと無我の大我に着眼して私利の小我を破するもの、これ經に所謂如來惠むに眞實の利を以てするものにあらずや。

○ 人々虚偽の利に迷うて、眞實の利を忘れ、部分の利を争うて全體の利を失ふ、上層の利に執じて資本萬能を呼び、官權萬能を叫ぶの没理義たるは云ふまでもなく、下層の利を骨張して労働者の支配を説き、プロリタリアートの跳梁を讚美するも亦共に分に即して全を忘れたるものたるを免れず。吾等の望む所は官民一致の協力的なり、吾等の計る所は資本家と労働者とに均霑せしむべき全體的のものならざるべからず。

らす。

○ 虚心坦懐、これ心火を滅却する最善の工夫なり、念頭一點の塵なく、萬象明かに映じ来る。今の思想を評論するもの、新に就くものは西洋の思想としいへば、一も二もなく無批判的に信順し、東洋の思想としいへば、是非を問はず之れを排斥し、舊を守るものは東洋の思想といへば一も二もなく辯護し、西洋の思想といへば善惡を問はず、之れを排斥す。此に於て想到撞着を生じ、義に矛盾を免れず、虚心坦懐採るべきは採り、捨つべきは捨つ、能く明鏡の妍醜を判つが如くにして初めて可なり。

○ 時代は水流の如し、これに逆行せんとするは勞あつて益なし、しかも徒らに時代に追隨せんとす、これ阿世の論たるを免れず、さればとて時代と相遅れては當今の

問題を議し難し、世の指導を以て任ずるものは明かに時代の趨勢を看取して、一步を時代に擢んでざるべからず。急流を下るの舟夫が水勢を利用して、舟をして趣く所に趣かしむるはこれ吾等の學ぶべき所にあらずや。徒らに流れに任して舟よく全きを得るか。岩角に掉し、懸崖に轉じて其の全きを得せしむる所、最も苦心の存するを見ずや。

○
水、もと無心、一滴二滴の木の葉の露、落ちて苔の細道に清冽玉の如き谷の清水となり、流れくは潺湲、石に激し、飛沫躍つて雪の如く、或は綠陰濃かなる處、止つて碧潭となり、又流れて漸く大に、漸く緩く、漫々として廣野を廻り、蘆荻茂れる邊、時に白帆の去來を見、白砂を青松の下に齎らし來つて海に入る。人生此水に學んで漸く氣宇の大なるを得んか。

輪の月

天は高し一輪の月、月は不變の光を放てど。浮雲去來して時に其の影を潜む、潜めたりと雖も月なきにあらず、衆生の心性も亦又た此の如し、妄念去來するも豈に本性の明を失はむや。妄念の拂拭は修養の手段にして浮雲の去來は人事の當相なり人事の當相に順じて、しかも其の明を失はざるは達者にして初めて臻り得べき修養の極致なり。

○
「此の世をば我が世とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思へば」の御堂關白の樂觀の裏面には「心にもあらで浮世にながらへば戀しかるべき夜半の月かな」との悲觀の御方おはします。一輪の月、たゞ見る人の心に任す「月見れば千々にものこそ悲しけれ」と見るも主觀の反映なれば「月によい惡七兵衛と名乗りけり」と洒落の

めすも其の人の氣分に屬す。

「雲にたゞ今宵の月をまかせてん、厭ふとしても晴れぬもの故一人事達観すれば何の悲喜かあらん、去るものは去るに任せ、來るものは來るに任せ、しかも心性の爲めに味まされざるものあれば即ち可。」竹影階を拂うて塵動かす、月、潭底を穿つて水に痕なし」何の執、何の着ぞ。

月、大江を照らして銀波碎け、草露に宿りて玉顆轉ず、轉ずるといへども月、動かす、碎くといへども月缺けず、千江水あれば千江の月となり、萬花、露を含めば萬花の月となる、機に應じ、變に隨ひ、しかも常住の本性皎として輝く、月の吾等に啓示する所尠少にあらず。

雲を排して月漸く現る。「かりそめの浮世のやみをかきわりて、うらやましくも出づる月かな、」風雲を叱咤して大功なり萬難を排除して事漸く成る。塵勞浮雲の如し、清風一陣之れを掃却するにあらずんば、何ぞ本性の光を見ん、明月清風を拂ひ、清風、明月を拂ふ、しかも月、風を妨げず、風、月を妨げず、心地此の如きに至つて初めて妙。

月光、偏私なく、もと朱門と白屋とを問はず、古人、狂體あり、公家も武家も今宵の月は町人も、あれ出て見さい、これ出て見さい衆生心性の月、豈に復た貴賤の別あらんや。何人も見よ。心裏一點の靈光あり、皎として汝の闇を破らん。

徒らに跡に着し、影を追ひて何かあらん。月は潭底に潜ますして高く中天に懸る。

本を知らずして末に走り、根を逸して葉を弄ぶ、終生役々何の得る所ぞ。高く眼を着けよ。月豈に脚痕下にあらむや。「相逢ふ相見て呵々として笑ふ、指を屈し頭を擡げば月、半天」。

○ 「日月盛明ありと雖も、覆盆の下を照さず」月色玲瓏、いたらぬ隈なきも自ら覆蓋するもの何ぞ其の光を受けん。心眼開き來つて月色鮮かに、覆蓋去り得て月光透徹す。漫に光なしと云ふ勿れ。月色、萬古に亘り、月光、微塵を洩らさず。

○ 月の吾等を淨化し、美化す。一輪満ちて清光遍き時、誰か塵勞を一洗して身を嫦娥宮裏に置くの感なからん。「月や我れ我や月か」とあかぬまで心もすめる秋の夜の月、物我一體、邪念なく、妄想なく、我れをして自ら大自然の靈感に觸るゝの感あらしむ。

○ 若し其れ千古萬古變らざる天邊の月に對して、地上幾多の變遷追懐せんか、古聖先賢曾て此の月に想ひを寄せ、幾多のを詩人は之れによりて金聲玉振の痕をとめ、幾多の英雄之れに嘯きて鋒を横ふ、月、語らずと雖も、想へば治亂の跡は我が前に現じ、錦心繡腸は我が思ひを動かす、月に史あり幾興亡、月に詩あり、幾名什、時に美人一滴の涙に宿り、時に貔貅百萬の血を照らす。況んや、萬里一碧、雁信絶ゆるの所も之れを照らして想思の情、たゞ此の月の付するものあるのみなるをや、天上一輪の月、古今を絶し、東西を離る。

○ 古今を絶し、東西を離るゝもの、之れ吾等を照護する絶對の光にあらずや、眼前の隠顯何の關するなく、一時の盈虧もと意に介せず、萬里雲なし萬里の天、一輪の明月に古今の情あつて我以て心を慰むべし、獨坐人知らず、たゞ明月の來つて相照らすあつて吾等は人生に光と力とを得るにあらずや。

觸 目 の 光 景

海 邊 松

八重の汐路を旅し來れる外つ國人の先づ眼に入るものは幾世經ぬらん岸の姫松にして、我が江山はこれによつて美化せられ、我が風光はこれによつて一段の雅趣を添ふ。白砂長く連る所、青松も亦長く連り、怒濤巖角を洗ふ處、龍鱗其の上に颯々の聲を送る。霜雪變じ難し千載の翠、潮風何ぞ挫かん磐根の節、松は實に我が國を標徴せるものにあらずや。群花に開落あるも、此れに古今の色ありて、しかも老來春に遇へば「常盤なる松のみどりも春くれば今一しほの色まさり」舊邦といへども維れ命維れ新なる、我が氣宇を表示するものと見得べからずや。

春 風

春風、都門を訪れて、御濠の柳、翠を含めば、それにまじる櫻の二つ三つ綻び初め都の春これより闌に、千代を囀る鳥の音も、いと長閑けく、春は次第に里より山に恵みの光を投げて、近き麥隴菜圃に陽炎の立ち上る頃には遠山、霞に罩まれて、淡靄の奥には深山櫻の笑み初めしか市に賣る柚人の薪の中には色濃き一枝を挿せるを見る頃は、都大路は燕子落英を銜み、新緑早や既に滴らんとするを見る。

彼 岸

春もや、景色とこのひて、早櫻笑みを含む彼岸の候に近きぬ。聖徳皇の言を想起する亦因縁なしとせず。「和を以て貴しと爲し、恃ふなきを宗と爲す。人皆黨あり、亦達者少し、是を以て或は君父に順はず、乍ら隣りに違ふ然れども上和し、下睦しければ事を論ふに諧ふ、事理自ら通せば何事か成らざらん」と。時を隔つる一千三百年聖者の教示今に新たなり。桃花水暖に、春風春水和し、花妍を競ふて争

はず、衆鳥聲を弄して相妨げず。和はにれ春の福音、而して人達者少く時事日に非なり、嗚呼理想の彼岸其れ何の日に加現せん。今日古訓を提示するもの等閑に視るなくんば幸なり。

春雨

目にはさだかに見えぬ春の雨が、夢のやうに烟る柳の糸を濕して露がバラバラと風にゆられて散る。思ひなしか櫻の枝が稍々紅の色をばかして野邊の草も緑に萌ゆるやうである。濡れ燕が右から左へ、左から右へと飛び通ふ中を蛇の目の傘が二つ三つ並んで行く。春の雨は静かである。此静かな中に萬物は育まれて緑は濃かに、紅は深く、やがては落花を踏んで春の行くを惜むの雨となるのであらう。

新緑

昨日の花の夢、消えて若葉に匂ふ朝日影、満目早や春姿を留めずと雖も、狂蝶の尚ほ餘芳を尋ぬるあり。暦は六月に入るも候は漸く立夏を過ぎ、炎帝未だ威を弄せずして風は徐ろに新緑を拂ひ、雨は静かに積翠を洗ふ。晴に好く、雨に好く、朝に好く又暮によろし、淡烟樹を罩みて遠山眠り、宿雨霽れ來りて碧葉覺むるが如し。清新の氣、自ら人を襲ひ、念頭を洗却して一塵を留めざらしむ、満目の青山、満地の新苔、亦我を啓覺す。

端午

高眼達識の士、此塵世を下瞰して、誰れか「世を擧げて濁り、我れ獨り清し、衆人皆な酔ひ、我れ獨り醒む」の感なからむ。潔士屈原之れを慨して憂悶終に身を汨羅に投ず。其の志は以て高しとすべく、其の節は以て潔しとすべきも、此の如くにして濟世の實、何の所に擧り、利民の業、何れの時にか成るべき。「滄浪の水清め

ば以て我が纓を洗ふべく、濁らば以て我が足を濯ぐべし」何ぞ湘流に赴て江魚の腹中に葬らるゝを須ひん。支那の俗五月五日を以て屈原投流の日として之を憐むと憐むべきは即ち憐むべし。しかも吾等の學ぶべきにあらず。奮つて澎湃たる濁流を排し、誓て天下を覺醒せんとする所に丈夫の意氣は存す。俗、もと支那に出でたりと雖も、我が端午は蒙古征伐と關聯し、尙武の精神と相待つて、又此澤畔詩人の哀愁を帯びず。直下千丈、之れを排して遡らんとする鯉魚の幟は初夏の天に翻り、薰風潑澗の英姿を吹いて我が國民を警覺す。

牡丹

梅櫻桃李、花既に謝し、殘紅を落盡して始めて芳を吐き、而かも妖艷百花に勝れ、國色四季に秀で、眞に群芳を總領するの觀あるもの唯だ此の牡丹か。花に清高の氣なしといへども、色に王者の概あり。自ら春山に殿して悠々として、世を炎帝の領

するに譲り、散り去つて痕を止めず。天下の喜びに後れ、天下の憂に先づ、此花も亦吾等に教ふる所なからずや。誰かいふ
「笑ふに堪たり牡丹かくの如くに大、一事を成さずして又空枝」と、一事成さざる所、別に大なる使命あり。之れを看取して我が心を大にせむか。

梅雨

「軒くらく木々の葉のをやまぬは、憂しや今日より五月雨の空候、六月に入り、宿雲低く垂れて濛々の雨は萬物を濕了し、幽鬱の氣、人を襲ふ。しかも之れあるが爲めに稻禾育し「今は又さつき來ぬらしいその上ふるのあら田に早苗とるなり」降りしきる雨の下に笠を並べて早苗とる。満目の青秧、烟の如きの雨、最も厭ふべきの雨は最も喜ぶべきの雨。此間生産あり、詩趣あり、何ぞ漫に其の陰暗を厭はむ。

夏の天地

生氣潑潑は夏の象徴なり。直射し來る日の光を受けて燦として輝く青葉若葉に活趣横溢し、巖を砕く山の瀧つせ、涼を送る樹上の蟬、悉く生氣の躍動せざるなし。若し其れ黒雲天に漲り、白雨盆を覆へし、電閃きて之れに應じ、雷鼓して之れに和しては、峻烈豪宕、觸目の風物一の隋氣を許さず、しかも驟雨一過して山更に青く、露を帯びるの萬象に復び日の光の輝きては、清新の氣、天地に滿つるを覺ゆ。

消暑

「大名とあふがれながら暑さかな」、暑熱何れの處にも來る。山中自ら山中の夏あり、海邊亦海邊の暑あり。若し清涼の境を求めば蝸塵尚は一庭の清風あり、市井の中亦水の如き夏の月の路樹の枝を洩るゝなきにあらず。徒らに暑を他に避くるを

須ゐず、我が家自ら我が家の消暑法あり、一掃、塵を洗つて靜かに任意の書を繙く、讀むで蝸心の處に至れば、明媚の風光髣髴として眼前に出來し、脱俗の詩趣湧然として書中に進出し、涼氣、心頭に生じ、清風腦裏に起る。暑を消す、此の如し、亦何の費をか要せん。笑殺す、江湖豪華の士、此閑天地を知らず、暑を山水に避け、却て心を熱鬧に走する何ぞ多き。

驟雨

炎蒸、我れを煮沸せんとする三伏の天、忽ち黒雲垂れ來りて、大粒の雨一つ二つ軒の簾の風に動くと見る間に、銀箭斜に庭際を射て沛然として注ぎ、閃く電と共にとゞろく雷の、一さわ聲高く我が耳を聳すると思ふ間に、雲過ぎて、夕陽、草露に輝きて、其の根にすだく虫の音も早や秋かと疑はる。山雨一過山更に青し、人生、此一英斷の轉換期なかるべからず。區々、常を守つて何の快味かあらむ。

扇

風性常住、處として周からざるなし、何が故に殊更に扇を須ひん。風性常住、處として周からざるなきが故に、扇頭常に風あり、開けば三角、三界を示し、たゞめば一本一心を標す、開閉自在、涼を與奪す。這裏、風ありや、將た無しや。涼風もあふげば出るあふがねばもとの素地の扇なりけり、此扇を左右するもの誰ぞと參到し見よ。練心の訣此中にあり。

秋風

人生、若し四時の喩を用ふるを許さば、一草落ちて天下秋ならんとするは、これ中年の悲哀を誘發せずや。昨日まで陰を爲したる梧桐の婆娑として一葉又二葉、窓に訪れ。庭に茂りし木の葉の次第に色づきて、やがて又風に散る。花やかなりし青

雪

春の希望、夢の如くに消え、盛んなりし壯時の活力は日に衰へ、尙ほしかすがに棄て難き壯心の幾縷の執着を人生に繋ぐあつて追懐の涙は懊惱の情に伴ひ、しかも其の來る所のものは落寞蕭條、嗚呼孤影悄然として我が生も亦逝くか、されど慨く勿れ、梧桐落ちても、紅楓錦を飾り、萬花謝しても尙ほ東籬菊花の芳香を放つあり、況んや、人生の收穫寧ろ汝の前途をして黄雲天に漲らしむるものあるをや。寒來暑往、我が生は長し。

六花繽紛、其の一片を拈し來るも轉た感想を深からしむ、雪山の雪は大覺世尊を生み、少林の雪は東土傳法の源を開き、アルプスの雪には英雄の跡を止め、朔北の雪には義人が節を思ふ、富嶽千秋の雪は高く我國を標置し、江東雪の曙は長く武士道の花を散らす、みやもわらやも一樣に唯だ白妙に淨化し去る雪一夜、區々の

塵勞に蔽はれたる我が心垢を洗滌して窓外の枯木再び花を冠する如き清淨の感ありしむ。

理想より現實へ

人の發明

人間が此世の中で發明を致しました一番大きなものは何であるかと申しますならば、それは是まで四つ足であるいて居つた動物が、立つて歩くことを發明したのが、人類の最も偉大なる發明であると云ふことであります、動物學で教へられる處に據りますと、我々の先祖は矢張り四つ足で這つて歩いて居つたのでありますそれが二つの足で立つことが出来、外の二つの足即ち手と申して、是が不用になつて、さうして斯う立つて上を見る事が出来るやうになつたのが人間の一大進歩であるに違ひない。若し人間が四つ足で歩いて、眼が下ばかり見て居つたならば、何時も現實に囚はれて高遠なる理想を捉へることが出来なかつたのであります。處が幸にして人間が立つて歩いて此人間の眼が高く天を見る事が出来る、此人間の眼は遠く

高き理想を洞見することか出来るのであります、人間の眼は高く天を見ることが出来ましても、人間の手は地面を掴むことが出来ませぬ、即ち高き遠い處の理想を爲さうとすれば、現實の道德に觸れることは出来ないであります。人類の根本の歴史は、現實から理想を辿りまして、此事はしてならぬとか、しなければならぬと云ふ現實に關する正しい理想の變ることなしに數千年反轉したのが人類の歴史であります。人類は現實より理想を辿つたのであります。此現實より理想に行きますのが向上の精神、併し私の今日御話しやうと思つて居るのは、其の反對で理想より現實に向いて行くので若し現實より理想に向つて行くのを向上と云ふことが出来るならば、私の是から話すのは向下でありませう、即ち下に向ふのであります。何も私が風變はりに人が向上と云ふのに、向下と云ふことを言つて喜んで居るのではない、思想廻轉の順序と云ふものは、現實より理想に上つて、さうして其理想より現實に下つて行く所に妙味があると云ふのであります。

思想廻轉の順序

試に思想廻轉の順序を見ますと、一番初めは稱して混沌の時代と云ふのであります、全く事理明白でないのであります、萬象の差別が明かでなくして、一つの事に用ゐられる理窟はどこへでも通るやうに考へて居ります、實に混沌無差別の時代が一番初めの思想であらうと思ひます。其次はさう云ふ状態でなくして推理をしましても、判断をしましても、實に滑稽のもので、所謂一律を以て總てのものを推して行くと云ふやうな推理判断が第二の思想である。其混沌の時代は我我が嘗て見る事が出来たのであります、諸君はエスキモー人が氷の透明なる物を口に入れると溶ける、そこで透明なる水を口に入れると溶けると云ふ事實から類推して、透明なる硝子でも口に入れると溶けると結論したと云ふことがあると云ふ話があります。透明なる氷片が口に入れて溶解するならば、透明なる硝子も亦口に入れて溶解する

だらうと云ふのは、實に混沌時代のものであつて、今尙ほ野蠻民族に於て見る處の推理であります。何もさう云ふエスキモーを引張出さぬでも、今から六七十年前の漫筆を讀んで見ますと、我日本人も混沌的推理をやつて居つたことを見る事が出来る、それは此或書物を見ました所が、疫病が流行した、それは虎列拉のやうなものでありませうが、疫病が流行すると云ふので、昔は郡代屋敷に願出まして疫病神に差紙を付けて貰つたと云ふ逸話があります。昔は總ての事が官權萬能でありましたから、疫病神も御上の仰せならば立退くだらうと云ふので、差紙をした、其文言が面白い、何々村に疫病がはやつて死人が澤山出来る、さうすると名主よりして代官に申出る、私共の村に疫病がはやつて困りますから、御代官から疫病神に差紙を付けて戴きたいと云ふのであります。それは表に書いて、代官所の名前があります。さうして宛名は何々村疫病神にしてあります。

普天之下、率土之濱、莫非王土、汝疫病神、何故立入此村乎、早速可立退者也、

萬一於不退散、令午頭天王、屹度刑罰可申付者也。

何々村代官何印

と書いてあります。斯う云ふ事を書きましたのは、昔は一切の事が代官の所で取締られるから、疫病神でも御上の仰せで立退かせることが出来ることと云ふことを考へたのであります、大變不思議な事を考へたものであります、昔の混沌時代には一律を以て總てを推して參りまして、何の差別もなく、差別なる事理がないと云ふのであります。其混沌時代の状態が経過しまして其次の思想廻轉の時代を事理明白の時代と云ふのであります。總ての物は道理に據るべきものであると云ふので、硝子は硝子であり、氷は氷であると、一々萬象を歴然と區別をしまして、其區別の中に於きまして特色を認めて往くと云ふのであります、所謂分析的の時代と申しませうか、總て甲は甲、乙は乙、丙は丙と、總ての物をびつたりと區別を致して往く時代になるのであります。處が左様に萬象を整然として區別を付けて居ります時代は未だ思想變轉の十分なるものでない、此一々の區別の中に一貫した道理があると云ふこと

を更に認めて來るのが第三の時代であります。萬象には様々の區別があるけれども、其區別の中には一貫して居る處の一つの物があると云ふことを認めて往く時代に進んで來る、即ち平等の時代と申しませうか、或は理想の時代と申しませうか、現實に囚はれたり、萬象を一々區別した時代から一步進んで總ての物が平等であると云ふやうな所に進んで參ります時代に到着する。例へて申しますならば、我々は常に之を見るのでありますが、姿の上から見ますと現實である、宇宙萬象一つとして同じ物がないと云ふことを我々は見ることにあります。萬象歴然として宇宙に同じ物がない、私に云つたならば世界廣しと雖も、萬國多しと雖も、私と云ふ私は無、何でもさうであります、同じ物と云ふのは、同じ所に於て、同じ時間に存在する、之を同一と云ふのだから、同じ物は一つもない、此水差は世界廣しと雖も、萬國多しと雖も、是は一つしかない、宇宙萬象同一の物はない、是は現實の姿であります。併し一步踏込んで其本體を見るならば此水差も、徳利も、茶碗も、皆土で

あります、姿は水差とか、徳利とか、茶碗と云ふ風に、色々變つて居るけれども、其本體が土であると云ふ點に於ては同じ物である。更にモウ一步進んで考へて見ましたならば、此水差と私とはさう違ひはないと云ふことを見る、私と此水差にさう違はぬと言ふと、馬鹿な事を言へ口がある所は違ぬけれども、非常に違ふ、なせ違ふかと云ふと、水差と私とは姿が違ふ、併し其本體の土臺に踏込んだならば私と水差はさう違はぬ。此水差は何であるか、土で出來た物である、私は何を食つて生きて居るか、米である、米は何で出來るか、米は土で出來て居る、さうすると米は土の子で、私は土の孫に當る、詰まり其處まで往くと、水差と人間であるけれども同根であるからして、萬法一體なり、現象皆一なりと云ふ處が、即ち平等の時代、其處まで進んだならば我々の思想は變はらないのであらうか、究極するものであらうか、是までは現實の姿に彷徨うて居つたものだ、現實の姿を破つて本體其物を洞見する、本體其物を洞見したならば我々の思想は究極したかと云ふと、否

然らず、更に一段進んで、一度本體其物が現象に現はれて居り、理想からして現實に應用されたものを見る所に於て、眞に我々の思想が應用推理實現の時代に至るであらうと思ふ。例へて申しますれば本體は水であり、現象は波である、詩などに烟波渺茫とあるけれども、其本體は水である、水を斯う云ふ器に盛つて此上に置けば叩くと揺れる、さう云ふ小さな水も、狂瀾怒濤と云ふ波も、同じく水である、けれども、水を離れて波はない、波を離れて水はない如く我々は宇宙の本體の中に實在して、宇宙の現象の中に現はれて居るのであります。其本體であるものが現象になつて現はれて、本體即現象、眞如即萬法、平等即差別と云つて、此に眞の妙味が存在して居るのであるまいかと斯う思ふのであります。

宗 教 と 哲 學

私は此に來て現象即ち本體論の哲學上の話をするのでないが、それが實際我々

の修養とか、道徳と云ふ上に於ても、本當に必要な事であらうと思ひます故に思想廻轉論の順序を假に四つに分けて、混沌時代から推理判断の時代、更に進んで事理明白の時代、それから次には平等の時代と云つて、理想が實現せらるゝ時代、先づ斯う云ふ風に分けて見ます。是は何も私が初めて斯う云ふ區別をしたのではない昔から總て此事に就て話を致します時は斯う云ふ工合に四つに分つて往つたものであります。大乘佛教の極意と云はれて居る華嚴經に於きましても、此森羅萬象を觀ますのに四つにしてあります。第一が事法界觀、事法界觀と云ふのは萬象の歴然たる差別の上を見て往く、それから萬象は歴然として差別があるけれども、其の理の上には同じ物であると云ふて同じ點を見て往くの第二の理法界觀と云ひます。それから今言ふ通り事を離れて理なく、理を離れて事がなく、差別を離れて平等がなく、平等を離れて差別がないと云ふのを第三の事理無礙法界と云ふ。更に一步進んで事と事とが相互に離れずして同一であると云ふ姿を指して第四の事々無礙

法界と云つて居ります。即ち一度理想の境に上り来て現實の所に下り来た所に妙味があると思ふのであります。

更にセントペルナードと云ふ人が宗教の信仰に就て四に分けましたのは、斯う云ふ事を言つて居る、それは一番初の階級は、神にも、佛にも信心致さぬ、唯己れの爲に己れを愛す、俺さへ宜ければ人はどうでも構はぬ、所謂我利我利主義であります。其證據は汽車の切符を買ふとか、電車の切符を買ふ時に、能く見られるのであります、遅く来た者が後から這入ると云ふことは分り切つた話であるが、遅く来て早く買ひたいと云ふやうなことで、俺さへ宜ければ、神も佛も何もない、己れの爲に己れを愛す。第二段は己れの爲に神を愛す、神様は何の爲めに拜むかと云ふと、自分の爲に拜む、諸君が三崎稻荷とか、琴平様とか、観音様に行つて拜んで居るのを見ませう、其人の多數は何か己れの爲に神を拜するのであります、御賽錢を一錢とか、五厘とか上げて、どうか家連長久商賣繁昌致しますやうにと云つて拜む、あ

れは賄賂と考へて居ります、即ち一錢から五厘の御賽錢を以て家連長久を買收しやうと考へる、どうも世間にさう云ふ信者が澤山あるやうです、五厘では足らぬから一錢にしやうか、そんな事で観音様を買收し、琴平様を買收します、代議士でも一錢や五厘では買收が出来ない。それから第三段目になりますと、己れと云ふものを全く打忘れて神の爲に神を愛す、自分と云ふものを抛擲して仕舞つて神の爲めに神を拜むと云ふのであります、是が本當の宗教家かと云ふと、さうでない、さう云ふ者は或種の宗教の中には随分ある、唯神様が有難いと云つて、商賣の事も、何も彼も構はんで、或は山の中に這入つて我心の清きこと秋の月の如しと言つて居ります素より神は有難いけれども、此世の中は理想の世の中でない現實を理想に近付ければならぬけれども、此世の中は理想の世の中でないのであります。自分がそれを離れて羽化登仙して理想の境に至らんとして居ります、さう云ふ宗教信者は眞の宗教信者でない、死んだ宗教信者であります。我々は更に第四段に往きますと、今度

は理想の神から現實に下つて神の爲に己れを愛する己れの爲に己れを愛するのでなくして、神様の爲に我身體を愛すると云ふので、何の爲に今日斯うやつて働いて居るか我働く事が直ちに神の爲になる、それは一舉一動神の思召に副ふのであるから、日常の生活に體現したものが眞の宗教信者である、セントベルナードは理想が高いからと云つて、高き理想の境に憬がれて現實を離れては何にもならぬ、それで現實に居つて、我身體を愛する、我身體は一日生きて居れば一日道を行ふことが出来る、一日生きて居れば一日神の心を現はすことが出来る。それが宗教の愛であります。

理想實現の趣味

日本に於て最も偉大なる佛教、其佛教を二つに分けて自力と他力。自力と云ふのは、自分の力で悟りを開くことで、神の前に神なく、佛の前に佛なし、釋迦何人ぞ、達磨何人ぞと云ふのが自力であります。それから自分一人が悟るだけでない、百尺

竿頭一步を進めて、自分が悟りの境涯まで至つたならば、其悟りの上に止まらないで、其悟りの力を以て實生活に現はして色々の煩惱人慾に打勝つて往かなければならぬ、然るにさうでなく、理想の上に止まつて仕舞つて、俺は悟つて居ると云つて、山の上に登つて居ります、我心の清きこと秋の夜の月の如し、併し山の下におりると悟らないことが夥しいのである。現實の世の中に下して見て現實に應用させて往かなければ眞の活動は出来ないでありますから、彼の東坡は、廬山煙雨浙江湖。未到千般恨不消。到得還來無別事。廬山煙雨浙江湖。と言つて居る、他力と云ふのは、他方の援助に依つて人生の悟りを開いて往くのであります、確法安居は人生の最良である、極樂であると云ふのです、それをちつと晝寢して居やうと云ふのは迂濶である、極樂に晝寢をして居ては詰らぬと云ふのであります、他力に致しまして、セントベルナードの如き基督教の學者の説に依りまして、どうしても理想の境より現實の境に下つて来て日常生活に合致せねばならぬ、如何に理想が高くて、

實際の世の中と懸け離れては何にもならぬ、諸君に古い話をするやうであるが、哲學者が渡船に乗つて他に参ります折に、其渡船の船頭に向つて其哲學者か問を發した、御前は人生の問題に就てどう云ふ考へを有つて居るか。船頭曰く、さう云ふ事は知らぬ。それなら御前はヒイロンフイーを知つて居るか、即ち哲學を知つて居るか、と聞きました、そんな事なんか知りませぬ、私は船を漕いで居るのが職業で、其外は何も知りませぬ。と申しました、ア、可哀想だ、人生の問題に接せず眞に生甲斐のない奴だ、と言つた。私は生甲斐がないか知らぬか、私は船頭をして居ります、と言つた。其中に向ふの岸に船が着き掛けて引繰返りさうになつた、其時に船頭が先生、あなたは泳ぎを知つて居られますか、と問ふた。俺は哲學は知つてるが泳ぎは知らぬ、あなたは哲學を知らぬ者は生甲斐がないと言はれたが、泳ぎを知らぬと死んで仕舞ひますよ、と云つて笑つたさうであります。理想は必要であるが、それが現實の上に應用されて居らないと、迂濶なる生活が現はれて來るこ

とがある、我々の修養の上に於てもさうであらう、道德とか、修養とか云ふことは少しも考へ無いのが、所謂混沌時代と云つて、理想とか、道理と云ふものを知らなかつた時代であります、其次は是が修養である、斯うするのが親に對する人の道であるとか、斯うするのが君に對する人の道であるとか云ふ、其徳目に縛られて居る時代、是はまだ眞の修養の時代でないが、是が第二の時代である現實の時代であつて、徳目だけを知つて居る、さう云ふのは形式に囚はれた修養である、型に囚はれたものであつて、之を知つても實行をしなかつたならば其道德は何の效も無い。それに就て斯う云ふ話がある、或小學校の先生が生徒に向つて教へるには、親に物を言ふ折には、格子を這入つて下駄を能く揃へて上つて若し室内に襪があつたならば、静かに襪を明けて、親の前に行つて能く手を突いて静かに物を言はねければならぬと教へた、其生徒は利口な人でありますから、能くそれを覺えて仕舞つて、外から歸りますと、教はつた通り下駄を能く揃へて襪を静かに明けて親の前に手を突いて静

かに話をして居りました、處が或時弟を伴れて河端に遊んで居つた、其時に弟が誤つてドボンと河の中に落ちました、さうすると此處が先生の仰しやつた所であると云つて、外から這入つて、下駄を能く揃へて上つて、間の襖を靜かに明けて、親の前に行つて、弟が河に陥りました、と申しました、それ等は親を思ふ根本の精神がなくて、形式に囚はれたもので、親を敬ふ眞情は、親の心を以て自分の心として親が自分の弟を思ふほどの位であると云ふことを考へたならば、さう云ふ形式に囚はれて居られないのでありますが、其根本を離れて形式に囚はれたのであります。私は嘗て柳生但馬守の傳記を見て大變面白く考へた、柳生但馬守が自分の息子の十兵衛との位劍術が使へるか云ふことを試す爲に、夜椽の下に隠れて手頃の石を取つて、十兵衛が手水場から出て來た時に右の眼に打付けた、さうすると柳生十兵衛は石が右の眼に中ると左の眼をヒョイと押さへた、之を見て但馬守は是ならば劍術の名人であると思はれたと云ふことであります。諸君、我々ならばどうし

ますか、第一の石が右の眼に中ると、直ぐ中つた方の眼を押さへませう、さうすると今度第二の石が飛んで來てこつちの眼に中ると、さうすると本當の旨になる、此十兵衛が左の眼を押さへたと云ふのが劍術の根本義で、自分の身を護る所以であります。是ならば劍術の名人と言はれたのはもつとものものであつて、身を護る根本義を擱んで居るからであります、修養の何物たるを知らぬ者には徳目を教へなければならぬが、其徳目に囚はれて根本の修養を詰らない事のやうに思ふてはならない。併し我々は修養の型を離れては仕方がないのであります。

修養の方法として

偕其修養の型を離れずに根本の所を擱んだら、それで宜いか、其根本の所を擱んだら、それを日常の現實の上に應用して往かなければ眞の修養でない、それで親を大事にすると云ふ根本原理を擱んで居れば、親の助けをしなければならぬ、處が理

想に關係する者が大事だと云つて、餘り根本にのみ囚はれて仕舞つて、それを日常に現はすことが出来ないと言ふのは、所謂似非道德家であります。諸君も御存じでありませうが、支那の許由と云ふ人はどうでありませうか、彼は實に明德の人である、道德家であると云ふことを聞きましたから其時の天子が御前が代つて天子になつて自分の國を治めて呉れと云つて頼まれたところが彼はさう云ふ事を聞くのもしやだ、俺は今此の箕山の傍に在つて斯の如く精神を靜かにして居るのである、然るに俺に代つて天下を治めよと云ふのは聞くのも穢らはしいと云つて耳を潁川で洗つたと云ふ話があります。

耳を洗ふた心持は綺麗であるけれども、世を救ふ爲めにはそんな事をして居られない、理想の境より現實の境に下つて、さうして現實に應用して往くと云ふのでなければ、本當の世を救ふことは出来ない、如何に高遠なる理想と云つても、戰場に臨んで敵が攻めて來ても是が理想だから動かぬと云ふことは出来ない、理想は入用

であるが、現實に應用して往かなければならぬ、精神修養はどうかと云ふと、精神には色々變動がある、是は所謂菜根譚の中にある見聞覺知爲三外賊一情慾意識爲三内賊一と云ふやうに我々は見もせず、聞きもしなかつたならば、心も動かぬけれども見たり聞いたりする爲に心が動くことは澤山ある。

話は横道に這入りますけれども、劍術の無眼流と申しますのは無覺と云ふ人が諸國を修行して歩いて、或山路に掛かつて來た、段々やつて來て斷岸絶壁の所に來ると丸木橋が架かつて居ります、諸國を修行して此處に來たが其丸木橋が如何にも細いのであります、下を見ると斷岸絶壁であるから足が慄えて渡れない、そこでどうして渡つて宜いか知らんと思案に暮れて居ると、向ふから盲人が高下駄を穿いて杖を突いて來た盲人は其橋の所に來ますと、下駄を杖に差して、それを背中に差した、さうして這つて丸木橋を渡つて行つた、それを見て、成程俺は立つて歩かうと思ふから渡れない、あゝやれば行かれると云ふので、刀を背後に廻して這つて見ました

が、何分斷岸絶壁であるから目が眩んで仕舞つた、盲人は眼が見えないが心で見えて居るのだなと云ふことを悟つたので、是は心眼を明かにしなければいかぬと云ふので、無眼流と云ふ劍術を發明したと云ふのであります、橋が渡れないと云ふのは情慾意識に因る内賊と、耳目見聞に因る外賊と交々起つて内心は紛亂状態になる、其紛亂状態を打破るのに悪を止め善を講ずるの道を以てした種々の徳目や、種種の型を以て之を打破つて往くのは、まだ眞の修養でない是はどうしても眞に修養して往くには、是等の内賊外賊の垢を總て拭ひ去つて我心明かなること鏡の如くにして往かなければならぬ、そんなら鏡の如くになつたならば修養が出来たかと云ふと、否、私は心が鏡の如くになつたならばとて眞の修養ではないと思ふ鏡と云ふのは物を映す處で始めて鏡の働きがあると思ふ、心は明かなる鏡の如くで明々煌々と光を放つて居ても、之を以て現實の世の中を照して往く働きがなければ何にもならぬ、私の心は鏡の如くなることも必要であります、萬象差別の曇なく一點拭ふ如くの

鏡になつて、其鏡が歴然と物を映すやうな、詰り第四段の働きのあるものにならぬければならぬ、鏡は明かなものであるから、花が来れば花が映り、鳥が来れば鳥が映ると云ふ風に少しも執着の念が内部になく、鏡の如くに萬象歴然として其影を映すことの出来る境涯に入つたならば眞に理想の境に到達したのである、此鏡は偏頗のものでないから都合の好い物は映して、都合の悪い物は映さぬと云ふことはいから、我心を清くして鏡の如く能く物が映るやうに心懸けて往かなければならぬ、これが理想の現實化であります。

生の悲哀

死

父を喪ひて

私は今年五十歳に相成りまして、初めて父を喪ふたのであります。世間の人は五十歳までも両親の揃つて居るのはお目出度いので、大抵は二十歳代か三十歳代で別れるのだと云はれますが、何歳になつて別れても、お目出度いと申すことはありません。今少し生かして置きたかつたといふ考の起らぬことはござりません。殊に私の父は武家に生れまして、先祖代々豊かな俸祿に暮らして参りましたのが、私が生れて間もなく版籍奉還となりまして、慣れぬ士族の商業に忽ちの中に零落いたしました。

とても御話にならぬほどの貧窮に陥つたのであります。其の中にも此の子を立派に育てたいとて、私に貧苦を知らせまいと苦心せられたことは思ひ出しても涙の種であります。或る時私が近所の子がいろ／＼な見世物を見せてもらふのに、私ばかりヂット家に遊んで居るのを嫌だと申しましたものですから、父は少しの金を工面して私を大阪の千日前と申す見世物小屋へ連れて行つてくれたことがありますが、何の不幸か、父が持つて居りました少しの金を掬摸に盗られて私は道から泣く／＼歸つて来たことがあります。其の折の父の心はドンナであつたであらうと今思ひ出しても涙を止ることが出来ません。かゝる貧苦の中に私を小學校へも入れ、私の祖母—今は亡き人の數に入りましたが—は私に學資を供するため其の頃五十歳の高齡でありましたのに、女學校の選科に入りまして教員の資格を得、其の俸給を持つて私を小學以上の教育を受けるやうにしてくれました。私はかゝる父母や祖母の苦心の中に教養せられましたので、父の苦勞に對しては特別の有難さを感じて居

るのであります。やうやく私が獨立の生活を立てまするやうになりましてからは成るべく父母に苦勞をかけまいと苦心したのであります。私の収入が乏しいものでありますから常に苦勞や心配を斷やさなかつたのであります。併し其の中でも、私が少し心をつけまして僅かな物でも父のためにと買つて参りますと、父は他人より貴ふ立派な物よりも喜んでくれたものであります。私は常に旅行勝ちでありましたが、旅行先から一日でも書面を怠ると父は非常に心配しまして電報なぞで問ひ合せてくれますし、其の旅先から少しの物でも送りますと、大喜びで居つたのであります。其の父に今は別れたのであります。少しの物でも喜んでくれる人はなくなつたのであります。幸に母が残つて居りますから、これから二人分の孝養を盡くさうとは思ひますが、男を理解して呉れるものは矢張男親であります。其の親を今失つたのです。たとひ五十歳になつても、嬰兒が親を失つたやうな心持がいたします。人間世に立つて自分の長所短所をも理解しこれに同情してくれるものがないほど

心細いものはありません。親は子の心を以て子として、子の病ひを以て自らの病として心配してくれるのであります。衆生病あるが故に菩薩病ありとある御經の心と同じく子に病あれば親も亦病み、慈悲の目に憎くしと思ふものぞなき罪ある身こそ尙ほ憐れなれ」との佛の心と同じ心を以て「憎くい子ほど尙ほ可愛い」と感じてくれるものは親の外にはないのであります。此天地の間に誰れか我が心を知り、我が罪を許し、我れを慰め、我れを獎ましてくれるものがあります。私は今に至つて孤寂の悲みを禁ずることが出来ないであります。父母の恵みは唯だ我れを生み、我れを育て、我れを養ひくれたのみではありません。大慈悲の念を以て常に我れを哀愍護念してくれられたのであります。佛は「父母我れを生みて劬勞す、此恩を報せんと欲するも昊天報じ難し」と仰せられました。山よりも高く、海よりも深き父母の恵みも、其の世に在るときは、さほどにも感せませんが、既に此の世に在さぬとなりましては「あゝもして置きたかつた」「かうもしたかつた」といふ追懐の

感に打たれざるを得ません。

これ我が父を喪ひし時の感想であつた。爾來數閱月、尙ほ在すが如く、旅にあつて其の安否を問はんとして筆を執りしこと幾回ぞ、家に歸りて歎び迎へたまふ慈顔なきに心淋しく感せしこと亦幾回なるを知らず。五十年の久しき、我れを獎まし、我れを慰められし人の幽明境を隔て、夢の外には相遇ふことのかなはぬには、人知れぬ涙の乾くひまなきを感せざるを得ない。せめてもの慰めは、父が此世を去りたまひし時、何の思ひのこしたまふこともなく、

浮世古稀無二一功、 迷雲散盡屬三元空、

光明遍照真如月、 乃領清涼極樂風、

苦勞なき身にも浮世のおん別に

みなくさらば南無阿彌陀佛

その詩歌をのみかたみとして心靜かに彼の岸に赴きたまひしことである。

亡き祖母

曾て我れを育みたまひし祖母を喪ひし時、我れは病を得て、熱海の客舎に追懐の心を寄せて左の文を稿したことがある。

◎明治三十五年十二月八日は、吾に於て忘るべからざる日である。我が最愛の祖母は此前日に死去せられて、此日其葬儀を擧げ、翌九日は予が重患に罹りて人事不省に陥つた初めである

◎予が醒覺したのは十三日で十五日には赤十社病院に送らるゝことゝなつた其時に憂へに沈みたまへる双親は互に顔を見合せて「母上は實に幸福な人であつた」と細語れた、双親の母上といひたまふは、言ふまでもなく、我が亡き祖母である。

◎逝去せられた祖母が、何故に幸ひであらう。双親は實に生きて我が重患を見るより死したまひし祖母を幸福とせられたのである。予は此言を耳にして暗涙に咽ば

すには居られなかつた。何たる不幸なことであらう予は双親をして生を悲み死を慕はしむるほどの病に罹つたのである。

◎幸に予の病患は、さほどにもなく、日々に快方に赴くことゝなつた、此の時に双親は予の顔を見て、「祖母さんが居られたら、さぞ喜ばれるであらう」と云はれた、嗚呼其祖母は今此世に亡き人である、慈顔髣髴として尙ほ目にあり、而して最早や遭ふことは出来ないのである。

◎わが亡き祖母は實に不幸な人であつた、松平但馬とて千石取りの御家老の家に生れ、藩公とは淺からぬ血肉の縁ありながら、庶子であるといふので幼少から繼母の手に育てられ、終に生活の度も低い三百石の我が祖父に嫁せられたのである。

◎我が祖父は藩中の學者と云はれたのであるが、家は赤貧洗ふが如しであつた、祖母は榮耀に育ちたまひし身を以て能く此貧乏世帯を整理し、家門漸く繁榮に赴かんとするの途端に、祖父は逝去せられ、維新の改革となり、廢藩置縣となつたの

である。

◎予の生れたのは、祖父の死したまひし翌年で、憂の中にも、せめてもの慰藉と、祖母上は初孫の予を掌中の玉の如く愛せられたのである。予が四歳にして乳母の手を離れた時は、帯刀已に廢せられて父上は牙籌を手にはせらるゝことゝなつた。

◎諺にもいふ士族の商業、殊に濶達にして無勘定なる父上の儲けたまふべきはずはなく、忽ちの中に倒産の非運は我が一家を見舞ふたのである、父上は如何かして之が回復を計らんとて千辛萬苦したまひ、母上は心痛のあまり乳も出でねば、我が弟(亡き)を懐にして日夜に泣きたまひ、一家は實に悲酸の極に達したのである。

◎今も記憶してをる。大阪谷町の佗住居に、夜に入るとも點すべき燈油がないので祖母上は縁日の眞似ぞとて焚火して吾を慰めつゝ一夜を明かされたことがある、祖母上母上は賃仕事の忙がはしく飯焚きたまふ間もなく、吾には芋を與へて「今

日はこれにて辛抱せよ」といはれたことがある。

◎其間父上は旅に出て、いろ／＼の計畫をせられたが、悉く失敗に終つて、遂に牙籌を抛つて京都に出て某新聞に筆を執らるゝことゝなつた、其時は予は早や學齡を過ぐることに三年となつてをたつたのである。

◎其後父上の業務はしば／＼轉せられたが、家道は未だ豊かなりといふ方ではない。(勿論大阪時代のやうに困難ではないが)ソコで祖母上は、五十歳の高齡を以て予の學資を得んがため、自ら京都女紅場の生徒となられた。

◎京都女紅場といふのは、今の京都高等女學校の前身で、女教師養成の爲めに横村知事の設立せられたものである。祖母上はこゝに就學三星霜を経て、予が少しく學資を要するの時分には、下京高松小學校の教員となつてをられた。

◎父上は常に吾を誡められて、「汝の學資は皆な祖母上の辛苦から出てをるのであるから、一日も怠てはならぬ」と、祖母上は實に予に學資を供せんが爲め老體の

身を以て日々孜孜として兒女教育の辛苦を厭はれなかつたのである。

◎しかも、疎懶の吾は、この高恩に酬ゆることも知らず、好むに従つて書を讀み學常師なきを誇る状態であつた。

◎予の東京に出た時は、祖母上は早や六十の上を越したまふて、健かにはあれど、老體のことゝて學校を辭して静修私塾といふのを開いてをられたが、予が、一家を構へると共に上京して家政を主宰せられた、爾來十有餘年、予は江湖に放浪して一日も祖母を慰むることが出来なかつたのである。

◎それにも拘らず祖母上は吾を愛したまひて予の著書の公になる毎に祖父が靈前に供して喜びたまひ、予の地方に旅行する毎に、神佛に祈誓をかけて道中の安全を護りたまふ、吾はこれを見、これを聞くごとに、涙を止むることは出来なかつたのである。

◎病院を出で、豆南に駒を養ふ三週、今や將に平生に復して東都に歸らんとするの

である、吾を第一に歡び迎へてくれらるゝ祖母上は、既に亡き人である、嗚呼、已に亡き人である。(冥想論所載)

死に行く兒

子を喪ひし時には、我には我が事業との衝突に煩悶の情を味ひて、左の文を稿したことがある。

喋々理を論じ喃喃道を談ずるとも事に當て惑はざるもの其れ幾人ぞ。予は理を論ずるに於て人後に落ちず。道を談ずるに於て敢て他に譲らず。しかも一小事の爲めに心惑ひ思ひ亂て躊躇逡巡、平生言ふ所何の價値なきの痴態を演出したり。予の末子あき子は兩三日前より肺炎に侵され加ふるに腸加答兒を併發して主治醫鈴木ドクトルは到底助かるべしとも覺えねと他の醫師にも諮りたまへと云はるるに小兒科に名を得たる須藤醫師を招きしも診斷鈴木氏と異らず、宮本醫士に問ひしも所詮救は

るべき道なし、されどこゝ二三日を過ぎなば良結果を得難きにもあらじと云はるゝを一縷の頼みとし看護婦に任せて予は常務に従事せしが、十二月一日(明治四十二年)は群馬縣澁川に赴く約ありて夙起旅装を整へんとするに臨床の醫師は今日一日は保ち難し少時待ちたまへといふ。死に瀕せる子を棄て、出づべきにあらねば一時間二時間と躊躇せしが、かくては澁川開會の間に合はず、此列車を外しては行きたりとも詮なし打電して斷らんかと思へど、折角の開會殊に講師は予一人のみなれば四里三里を遠しとせずして集れる聴衆の失望と發起人の迷惑とを思へば無情にも斷り難く、さればとて愛兒の死目に遇はざるも遺憾なり。行かんか忍び難し、行かざらんか、そも忍び難し。起ちては坐し坐しては起つ、其中にも時は遠慮なく進みて今行かねばと促し、兒の苦しげにもだゆる聲は微かなれども止まず、出でゝは歸り、歸りては出づ。

嗚呼何たる不決斷ぞ。汝、居たりとて死する子の生くるにあらじ、居らんとする

は汝の私情なり、汝行かずんば數百の聴衆は徒らに半日を費し空しく歸るの失望を見ん、行け！汝の平生云ふ所の道は婦女の痴態に安んじて公衆の迷惑を買へと教へしか。行け！汝の日常教ふる所は、私事の爲めに公義を枉げよと云ひしか。

されど、予は尙ほ躊躇するを禁する能はざりし。刻一刻、兒は死期に迫りて、瞬一瞬、發車は近づく。傳道者となる亦苦い哉。蹶然として予は出でたり。出で、又戻れり。戻つて予は瀕死の兒に最後の一瞥を與へたり。父となり子となる僅に一春秋、今は幽明相隔てざるを得ず、安かれよ！臨終！

漸く上野に辿りて發車せんとする汽車に投じ澁川に着すれば出迎の町長、郵便局長其他の有志は予を會場に導き、一通の電報を出していふ、先刻御宅より。嗟。

アキイマシンダカヘレ

静かに一席の講演を終り、事情を陳じて直に歸途に就く、汽車の歩み遅きこと牛の如く、午後十一時門に入れば香烟戸を洩れぬ。(明治四十二年十二月)

父の死に遇ひて其の追懷に筆執る勇もなく、殆んど我が半身を失ひしの感に襲はれて、僅に巻頭に「自己を中心として人生を觀せしめよ」との文を稿して、我れ吾を慰めたに過ぎない。人事葛藤、死は其の一切を裁斷すとはいひながら、遺りしもの、情は綿々として盡さず、殊に其の在せし家に居り、在せし室にあり、在せし人の手澤の品の目の前に遺りては、忘れ難き愚痴も亦人生の至情。女々として笑ひたまふな。

師を喪ひて

去年より今年にかけて涙湧くことのいと多く、舊臘、父の病ひ重かりし日、我々は我が師と頼みし大内青巒先生を失ひき。一月は父の喪に忙殺せられ、二月初めの二日、先生の百ヶ日を營まるゝの日、我々は友の請はるゝまゝに先生の行實を語りき。

私が初めて大内青巒先生にお目にかゝりましたのは、明治二十三年、私が「大聖釋迦」といふ小著述をいたしました時に、當時、内大臣秘書官であつた前の社寺局長 櫻井能監氏と妙法院門跡村田寂順師との紹介状を持つて序文を願ひに參つた時であります。私が佛敎界に縁を持ちましたのは此二氏と傳法院の奥田貫昭師（これも確か村田寂順師の紹介でお目にかゝり、其後お引立を願つたのであります）並に先輩で其頃浄土敎報の主筆をして居られた堀内静宇氏と宗敎革命論の著者たる中西牛郎氏との感化でありまして、先生に御目にかかる以前に八淵蟠龍師の國敎雜誌の編輯や中西氏の「經世博議」の編輯を手傳つて居りまして、其の素地をなしましたのは平井金三先生でありますから大内先生の門下といたしましたは外様に屬するのであります。一たび先生にお目に懸りましてから其の青年を愛されるのに心服しまして敎界の事は大小となく先生の御敎示を受くることとなつて、終に先生から私の「内地雜居の心得」を著しました時に、

われもまたかくこそ思へ口つきも

筆のすさびもさながらにして

との題詠を受け、爾來世間でも私のことを先生の直門として評し、私も亦先生の創始せられた「明敎新誌」の後を嗣ぐこととなつて何事も先生の仕事の後を追ふて行くやうになつたのであります。

それでありまして先生の前半生に就きましては、私は何事も存じませぬので、先生、生前に承はりましたことや、先輩や友人に聴きましたことによつて此略傳を認めることにいたしましたから前半の事實に就ては多少の誤謬あるを免れないと思ふのであります。大體の傳記を私に話せといふことでありますから、杜撰の罪は豫め御許しを願つて置きます。

御家系の事は精しくはわかりませんが、其の先は周防の大内氏に出で、其の大内氏は日本に佛敎を献じた百濟王聖明の末裔であるといふので先生の落款には「百濟

王^〇之^〇裔^〇」と刻したのもあります、大内氏^{おほうちし}亡^{ぼろ}びて後東北^{のちとうほく}に移住^{いせう}して世々^{よよ}仙臺^{せんたい}の伊達侯^{だてこう}に事^{つか}へて居^をられたので、先生^{せんせい}は實^{じつ}に伊達侯^{だてこう}の家臣^{かしん}を父^{ちち}として弘化^{こうけ}二年^{ねん}四月^{さむつ}十七日^{じちせ}仙臺^{だいいがし}番町^{ばんちやう}に生^なれ、幼時^{えいじ}、句讀^{くどう}を舟山江陽^{ふなやまかうやう}先生^{せんせい}に受^うけ、後^{のち}、大槻磐溪^{おほつきはんせき}先生^{せんせい}の門^{もん}に入^いつて眼^めを經史^{けいし}に曝^{さら}らし、且^{かつ}つ志^{こころざし}を佛門^{ぶつもん}に寄^よせて出家^{しゆつげ}して名^なを泥牛^{でいぎう}と改^{あらた}め、津梁^{しんりやう}を四方^{しほう}に問^とひ、殊^{こと}に原坦山^{はらたんざん}老師^{らうし}に歸投^{きとう}せられ、或^{あるひ}は一寺^{いちじ}の住職^{ぢゆうしやく}たりしことがあつたとも傳^{つた}へますが、それは僅^{わづ}かの間^{あひだ}のこと、或^{あるひ}は水戸^{みづと}に遊^{あそ}びて勤王^{きんわう}の士^しと交^{まじ}り、國事^{こくじ}に奔走^{ほんそう}せられたやうにも傳^{つた}へられて居^をります、其^その間^{あひだ}のことは不明^{ふめい}であります、先生^{せんせい}の名^なが江湖^{かうこ}に喧傳^{けんでん}せらるゝに至^{いた}りましたのは明治五年^{めいしご}「駁尼去來問答^{はくにこらいもんたふ}」の一書^{しよ}を公^{おほやけ}にせられてからであります、初^{はじ}め豊後^{ぶんご}の儒者^{じゆしゃ}廣瀨^{せりん}林外^{りんがい}氏^しが、出京^{しゆつぎやう}して正院^{せいあん}の編輯^{へん}官^{くわん}となりました時に、駿河臺^{するがだい}の會堂^{くわいどう}にニコライ氏^しと會^{くわい}して貴國^{きこく}と我國^{わがくに}とは共に君^{くん}主^{しゆんぐわい}獨裁^{どくさい}の政治^{せいざい}なれば云々^{うんぐんぐん}と語^{かた}りました時に、ニコライ氏^しが、否^{いな}、日本^{にほん}は衆臣^{しゆしん}役君^{やくくん}もいふべき國體^{こくたい}にて露國^{ろこく}の如^{ごと}く政教^{せいけう}二權^{にけん}を掌握^{しやうあく}せる眞^{しん}の君主^{くんしゆん}神聖^{しんせい}とは趣^{おもむき}を異^{こと}にす

と云^いふたのに感服^{かんぷく}して「尼去來問答^{にこらいもんたふ}」といふ一書^{しよ}を著^あしました。此^この書^{しよ}は實^{じつ}に我が國體^{こくたい}を汚損^{おごそん}して露國^{ろこく}を稱揚^{しょうやう}した國民思想^{こくみんしやう}見逃^{みのが}すべからざるものでありますのに、其^その行文^{かうぶん}の流麗^{りうれい}なるが故^{ゆゑ}に盛^{さか}んに讀^よまれたのであります。先生^{せんせい}憤然^{ふんぜん}筆^{ふで}を呵^かして「駁尼去來問答^{はくにこらいもんたふ}」の一書^{しよ}を著^あされました、論旨^{ろんし}といひ、行文^{かうぶん}といひ林外^{りんがい}の書^{しよ}を壓倒^{あつた}したものでありますから、大内青巒^{おほうちりやう}の名^なは忽^{たち}ち當時^{たうじ}有志^{いうし}の間^{あひだ}に喧傳^{けんでん}せらるゝに至^{いた}つたのであります。

何^{なに}しろ當時^{たうじ}は人材^{じんざい}要求^{えうきう}の盛^{さか}んな時代^{じだい}でありましたから此^この見識^{けんしき}あり此^この文才^{ぶんさい}ある大内青巒^{おほうちりやう}を任用^{にんよう}せんとして幹旋^{かんせん}した人も少^{すく}なくなかつたのであります、先生^{せんせい}は意^いを仕官^{しくわん}に絶^たちて、獨^{ひと}り大洲鐵然^{たいしゆてん}師^しの招^{まね}きに應^{おう}じて本派^{ほんぱ}本願^{ほんがん}寺^じ法主^{ほふしゆ}の講讀^{かうどく}に侍^じし、専^{せん}ら維新^{いしん}以後^{いご}衰連^{すいれん}に瀕^ひせる佛敎^{ぶつけう}剛隆^{かうりゆう}を以^{もつ}て任^{にん}とし、旁^{かたは}ら經世^{けいせい}濟民^{さいみん}の事業^{じぎふ}に干與^{かんよ}せられたので、其^その先生^{せんせい}一代^{だい}の中^{うち}に特筆^{とくふ}大書^{たいしよ}すべきことは明治六年^{めいしご}太政官^{たいてい}が火葬^{くわさう}禁止^{きんじ}の令^{れい}を出^だした時に之^{これ}が解禁^{かいじん}を左院^{さゐん}に建白^{けんぱく}せられたことであります。當時^{たうじ}水戸^{みづと}學派^{がくぱ}の高^{たか}

崎五六氏要路にあつて其の建白は數回之れを却下せしも、先生少しも屈せず、論難往復、木戸孝允氏を動かさし、三條、岩倉の諸公に具陳し、終に明治八年を以て解禁の沙汰を出さしむるに至つたので、今日に於て火葬の行はるゝ全く先生の力であります。その他、小野梓、馬場辰猪、井上毅、尾崎三良、矢野文雄等の諸氏と計りて「共存同衆」を組織し、外山正一、菊池大麓、辻新次等の諸氏と共に「尙學會」を起し、或は其の編輯を司り、又は初めて學術演説なるものを開きて人心を啓發し、「あけぼの」「江湖新聞」並に「明教新誌」等を創立して社長として主筆を兼ね、別に佐久間貞一、保田久成氏と計りて活版業を創めて秀英舎といひ、其の最初の社長たり、山尾庸三、前島密、野村靖、中村正直諸氏と共に樂善會を結び盲啞教育の事業をはじめ、今の官立東京盲啞學校最初の校長たりし等の事業一二にして止らず、其の間亦しばしば仕官を勧められ其の友人の多く官に就きしにも拘はらず、先生は依然として野に在つて教學の振興を計られたので、當時志を述べられた詩に、

稟性輕清飲喙微、沙邊翔集本依々、晚來翠浪翻爲雪、故向風波平處飛

又 墨江秋晚水烟寒、獨入蘆邊一釣竿、都鳥今吾無所問、滿城故舊總衣冠

というがあります。

専ら教學の興隆に心を寄せられたる先生の事業は、時事を論議して僧侶を啓發するには先きに挙げました「明教新誌」がありました、これは隔日の發行で當時に於ける教界唯一の言論機關であつたのであります。此外に「釋門哲學叢誌」といふのがあります、これは佛教の哲理を古人の言によりて平明に解説したので毎月一回位の發行でありました、其外「冠註唯識二十論述記」「冠註俱舍論頌疏」等の佛書の刊行を企て鴻盟社を創始して之れに充てられましたし、僧侶をして普通教育に利用せしめんがために、東京府廳と計つて小學校教員傳習所を設け、且つ各宗僧侶に授くるに高等なる普通學を以てせんとして高等普通學校を設立し、一般社會に對しては

尙和會や和敬會を起して佛敎演説を初め各地を布教して佛敎を鼓吹し、歐米崇拜の風滔々として我が國の上下風靡いたします際には尊皇奉佛大同團を起して自ら幹事長となり、全國を遊説して同志を募つて將に倒れんとする佛敎に新生命を與へられた功は實に大なるものがあります。若し其れ曹洞一宗に就て申しますならば曹洞扶宗會を起して宗門僧侶の自覺を促し、扶宗會雜誌（今の護法）を刊行して其の誘掖に力を致し且つ曹洞安心の基礎たる「修證義」の素地をなされたるの功は没すべからざるものがあります。

明治二十三年國會開設後に於ける先生の運動といたしまして最も熱心に主張せられ、且つしばしば建議書を提出いたされたのは「死刑廢止の建議」でありましたこれに次では「教界の有力者を貴族院に列せしめんとせられた建言でありました。これは不幸いづれも行はれませなんだが先生の偉効として没すべからざるは寧ろ其の後に於ける教育勅語の普及であります。儒佛二敎の精神によつて此勅語を分

科して一々聖旨の存する所を示された圖解は其後之れに摸倣して作つた他の人々の超越したる傑作で勅語を解説せんとするものゝ憑據すべき不朽のものであります。先生は此精神の傳達に後半生を送られたと申しても差支ないほどで、山村僻地に至るまで足跡國內に遍く兒童走卒に至るまで其の教益を受けたのであります。今一つ先生の事業として忘るべからざるは廣汎なる佛敎の原理を何人にも一目瞭然たらしむると共に各宗各派に亘つて一致すべき點を示さんとて明治二十四年に「信行綱領」を著はされたことでもあります。即ち佛敎を信と行とに分ち、信に於ては宇宙の體相用によつて三個の信條を立て、行に於ては止惡、修善、濟衆の三行を立て、此三信三行を以て佛敎の極髓諸敎の要旨として入佛の指針を示されたことでもあります。此三信開けば八萬四千の法門となり、此三行開けば三千の威儀五百の戒律となるのであります、これら解説布教も亦先生が後半生の事業であつたのであります、私は、(一)駁尼去來問答の著、(二)火葬廢止の建議、(三)尊皇奉佛大同團の運動

と、此の(四)勅語の普及、(五)信行綱領の作とを以て先生の五大功蹟と申したいと思ふのであります。

勿論先生の事業は之ればかりではございません。少壯時代より動物愛護に心を寄せ毎月不忍池畔の生池院の放生會を営みて之れを延壽會と稱し四十年の久しき今も行はれ、後動物愛護會の副會長に推されて會務に盡瘁せられ、或は子弟の教養に心を注いで門下生を愛すること子の如く、晩年東洋大學の學長として衆生を化せられた等々枚擧するに遑なきほどであるが、其の最も國家社會に貢献せられたるは流暢輕快の辯を以て地方を教化し、席、煖なるにいとまなく東西南北に講説して時代民心を策勵せられたことであります。先生以前に先生の辯なく先生以後に先生の辯なしで先生は實に明治大正に亘るの教界唯一の雄辯家であり又最も多く講説せられたのも先生で、私の聽く所によりますれば最近二十年間に於て講席殆んど二萬に達せんとして居るのであります。先生、頗る詩文に堪能にして其の吟咏の如きも

んど數十卷に達し、其他碑銘、傳贊等の作頗る多く且く書に於て自ら一家を成し、殊に隸書を善くせられたるを以て各地に先生の筆になる碑銘を見るのであります。若し其の著書に至つては難解の佛書を平易に講話せられたもの頗る多く、「碧巖講話」上下二卷を初めとし、「心經精要」「通俗心經講話」「原人論講義」「遺教經講義」「六方禮經講義」「禪學三要」等がありますし、其の講話筆記としては「處世の道」「佛敎の根本思想」「道は近きにある」等數十卷の多きに達して居ります。

大正三年秋、旅中に腦溢血を煩はされて身體の自由を缺き爾來横臥の身となられました。尚ほ講説を筆記せしめ、或は筆を執つて警世の文を稿して教化を怠らなかつたのであります。舊臘、流行性感胃に罹り肺炎を併發して終に大正七年十月十六日を以て示寂せらるゝに至つたのであります。時に年七十四遺偈にいふ。

雲心水迹。七十四年。山溪路盡。手脚茫然。

と、先生又曾て人に示していふ、

こゝもまた小川流れて梅さきぬ
 かの里いかにとく行きて見ん
 と、嗚呼七十四年、小川流れて梅咲きける此の里より更に樂しき寂光の彼岸に入り
 たまひしか、こゝに其の行實の一斑を録して追悼の意を致す次第であります。

生きんとする努力終

大正八年十二月二十二日印刷
 大正八年十二月二十五日發行

定價金貳圓

必定價販賣

譯者 加藤熊一郎

東京市京橋區桶町十五番地

發行者 株式會社大鏡閣

右代表者取締役社長 久世勇三

東京市神田區鎌倉町三番地

印刷者 百目木智璉

東京市神田區鎌倉町三番地

印刷所 共榮社印刷所

生きんとする努力

製



發行所

東京市京橋區桶町
 大阪市南區三休橋

株式會社大鏡閣

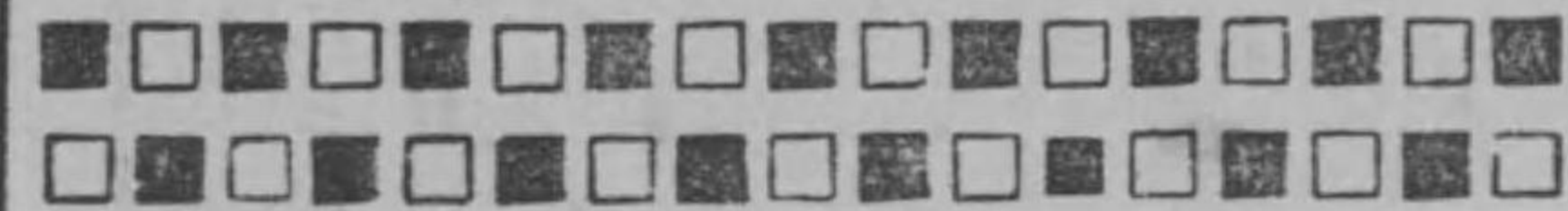
振替東京三三六一八 電話同四八七一
 大阪二七一五五

加藤咄堂新著

脩養百話

全一冊
四六判クロース本綴
函入装幀高尚
定價壹圓五拾錢
郵税内地八錢
滿鮮廿四錢

俗談平調能く人間處
世の根本義を誨ゆ。
苦樂の轉換、貧富の
超越、精進力行と安
心立命、其脩養方法
は悉く收めて此一巻
にあり。眞に維れ明
治の鳩翁道話、宜し
く想ひを潛めて讀む
可し。



自覺	世界的自覺外二項	自覺	成功不成功外二項	浮世の旅	浮世は旅外四項
修養訓	生死の關係外廿項	精神上の自活	唯我獨尊外四項	以和爲貴	治國富家の根本義外三項
自彊不息	五重の關係外十一項	宗教と修養	人格と自我外八項	智識と信仰	學問と宗教の相違點外五項
戊申詔書の眼目	日本の文明外四項	虎と獅子と狐	樂しき生活	他力の安心	他力宗の意義外三項
犬と人間	犬の傳説外二項	人生は苦か樂か外八項	人生と修養	實際的修養	人間の道外四項
			文學上より見たる維摩經	現實生活と解脱の趣味	人心の二面外六項

株式會社 大鐘閣發行

387

97

終